六という見解は、明らかに有部において考え出された説とみてよい。今、先に示さなかったが、その先駆的な資料として、雑阿1244燃焼法経[25]を掲げることができる。この経は偈文の中に「各別十六処。四周開四門。云々」という記事を示す。つまり、雑阿含の中にあって、この経のみ四周開四門の偈を示し、同時に八熱地獄の別処として十六種の地獄があることを記すのである。雑阿含が有部の所属であることは学会の通説であるから、この経の偈文で説かれる内容を基として、以後有部ではⓔⓗⓘなどの資料が、更に発展した説を考案していったものと思われる。以上、十六小地獄を巡る二三の問題につき若干の考察を加えたが、紙数の関係上、細部に至る説明ができなかった。

註

(1) Yājñavalkya-dharma-śāstra, 3-222 ff.
(2) Mānava-dhrma-śāstra, 4-88 ff.
(3) Viṣṇu-smṛti 43-1 ff.
(4) MN. 130 Deva-dūta 3-10.
(5) 大正一、一二一c（大正一、二八三c、同三二〇c）
(6) 大正一、九〇七c
(7) 大正一、五〇三a
(8) 大正三二、二一一c、尚この論には、ビルマ語本 Lokapaññatti (E, Denis, La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du bouddhisme ancien, paris, 1977) がある。その中、一〇八頁、一一一頁に十六小地獄の記事あり。漢訳立世阿毘曇論でいう4、烈灰汁にあたる語として vetaraṇi-nadi を当てているが（ ）付である。
(9) 北京版一〇九・b8L～。デリゲ版九一・b2L～。
(10) 大正二七、八六六c
(11) 大正二九、五八b
(12) 大正三〇、二九四c
(13) 大正二九・五一六b
(14) 大正三二、二二八c
(15) 大正三〇、二九四c
(16) 大正二五、一七六c
(17) 大正二、七四二a～c
(18) 大正一七、一b
(19) 大正一五、六四五～。
(20) 大正一三、七七七～。
(21) 大正五五、一一七c
(22) 同目録100頁a（南条文雄著、開明書院）
(23) 「支那仏教精史」744頁（境野黄洋著、国書刊行会）大正一、七五九a～。
(24) 例えば、ⓕ→剣葉林地獄をⓘⓗのように三分せず、一括して示す。また、糞尿地獄苦相第二は、長阿世記ⓐでいう豺狼地獄に内容が合致し、ⓘⓗ等と異なる。更に、八寒大地獄についてもⓘⓗなどとはかなり様相を異とする（拙稿「八寒大地獄をめぐる諸問題」京都文教短大、研究紀要第二〇集、一九八一年、参照のこと）ⓖ→四種といっても、現存チベット本をみると、1、糞尿、2、糞尿泥、3、剣葉林、4、鉄刺林、5、ヴェータラニ河?として、五種を示す。この中、1と2を同じものと考えれば四種となる。ただし、ⓘなどで示す、嬉煨地獄が欠落している点は不明。今後検討の余地あり。
(25) 大正二、三四一a～b

以上



# 仏の成道以前の物語と時間について

村上真完

仏教の歴史は、仏、釈尊を起点とし、仏の成道に始まる。仏の入滅から年数を数えて史上の年代を位置づけることは、経論にも説かれるが、その前提には仏の成道がある。成道以前については、誕生、出家、苦行、降魔が語られる。

さて、仏の誕生以前の時間—歴史—を仏教ではどのように考えているか。正確な年代記を残さなかったインドにおいては、仏教の経律論も、それについては神話的物語を残すにすぎない。しかし、そこに見られる物語も、時間も、釈尊とのかかわりあいによって語られる。これには二つの系統が考えられる。

一は釈尊が生をうけた釈迦族の王統を語るものである。『長阿含経』巻二二（世記経）は世界の初め（劫初）から説き最初の王民主以来釈尊にいたる王の系譜を説く。

この王統史は『四分律』巻三一にも説かれるが、比較的簡潔である。『仏本行集経』巻四—五、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻一—二、『衆許摩摩帝経』巻一—二は甚だ詳しい。

一方、仏（釈尊）の前生、前生話（本生、ジャータカ）が語られる。もっとも数多くの本生話には、必ずしもその時間（時代）について明確な観念があるわけではない。釈尊の前生について、明確な時間的観念を示すのは、その誓願（初発心）と、過去の仏による授記（受記）の思想である。その中で、燃燈（Dipaṃkara, 錠光）仏のもとにおける誓願と受記の物語はよく知られている（『増壱阿含』巻十一、巻三八、『四分律』巻三一、『修行本起経』、『過去現在因果経』巻一、*Buddhavaṃsa* 等）。

南伝（パーリ伝）では、燃燈仏のときにおける誓願と受記とが最初であるのに対して、北伝ではさらにそれよりも以前に、釈迦牟尼仏のもとにおける広熾陶師の誓願と受記を最初とする（『大毘婆沙論』巻一七七）。さらにその以前に大光明王であったときに、仏のみが心を調えることができる、と聞いて、成仏の誓願を発したともいう（『大智度論』巻十二、『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻十五）。しかし『賢愚経』巻三では単独に大光明王（釈尊前生）の発心物語を述べている。

初発心から成道までの時間を、北伝は一般に三阿僧祇劫と百劫、略して三祇百劫と数える。阿僧祇（asaṃkhyeya, 阿僧企耶）とは「数えられない」の意であるが、『大毘婆沙論』巻一七七や『倶舎論』巻十二等によると、第五二位の数の単位すなわち十の五十一乗であるという。劫とは大劫であって、世界が生じて存続し、破壊され、空無となる期間であるという。

三祇百劫成道が通途であるが、釈尊の場合は三祇九十一劫にして成道を得たという。これが九劫超越といわれる。釈尊はその前生において、底沙（Tisya）、あるいは補砂（Pusya）仏を、七昼夜の間、一偈をもって讃嘆しつつ、一足をもって立ちつくした功徳によって、成仏の時が九劫早くなり、弥勒よりも先に成仏を得たのだという（『大毘婆沙論』巻一七七、『大智度論』巻四、『倶舎論』巻十八）。

釈尊がその前生に逢った仏について、北伝の仏教は二十二万八千六仏を数える。『大毘婆沙論』巻一七八によると、



初阿僧企耶には釈迦牟尼より宝髻にいたる七万五千仏、第二劫阿僧企耶には宝髻より然燈にいたる七万六千仏、第三劫阿僧企耶には然燈より勝観にいたる七万七千仏、九十一劫中に勝観より迦葉波にいたる六仏に逢ったという。宝髻、然燈、勝観の三仏は重複している。『倶舎論』巻十八や『順正理論』巻四四ではこの重複を改め、この三仏は各阿僧祇劫の終りの仏であり、最初の釈迦牟尼仏のもとに釈尊は初発心をしたという。過去の仏名を多く列挙するものに、『マハーヴァストゥ』（III. pp. 224—250）や『仏本行集経』巻一～四があるが、右の説とは殆ど一致しない。『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻十五は三阿僧祇劫に出世した諸仏の数を示し、さらに六十数仏の名を偈に示している。[1] 釈尊はそれらの諸仏に供養し、諸仏より受記を蒙ったという。すなわち最初の阿僧企耶には釈迦如来より護世仏にいたる七万五千仏、第二阿僧企耶には燃燈仏より宝髻仏（偈では帝釈幢仏）にいたる七万六千仏、第三阿僧企耶には宝髻仏（偈では安隠日仏）より安隠仏（偈では迦葉仏）にいたる七万七千仏、および迦摂波（＝迦葉）仏があげられている。

以上は北伝の説である。これに対して南伝では釈尊の初発心は燃燈仏のときであるというが、その時期を四阿僧祇劫十万劫とする（*Jātaka Nidānakathā* pp. 2—3, 44）。南伝はそれより迦葉仏にいたる二十四仏を説く。

ブッダ・ゴーサの伝えるところによると、仏の願（patthanā）の続く期間は、短くて四阿僧祇劫と十万劫、中位では八阿僧祇劫と十万劫、長くは十六阿僧祇劫と十万劫であるという（*Paramatthajotikā* II. 1. p. 47）。なお辟支仏の場合は二阿僧祇劫と十万劫（ibid. p. 50）、釈尊の両大弟子の場合は一阿僧祇劫と十万劫、八十人の大声聞、仏の父母、仏の侍者、息子の場合は十万劫であるという（ibid. p. 51）。

南伝では、その願の期間が仏の場合が最も長く、大声聞や仏の侍者のそれは最も短かい。その期間が短いのは、それによって到達できる境地が低いことを暗示している。その場合、阿羅漢もさらに後に時を経て、行を積んで仏になる、という思想をブッダ・ゴーサは示している。燃燈仏のもとで賢者スメーダ（釈尊前生）は出家して阿羅漢の境地を得ることができた、という（ibid. p. 49）。（これは阿羅漢は仏にならない、という『維摩経』等とは異なる説である）。

以上、釈尊の前生における修行の期間、[2] 出会った諸仏の数に関して、南北の伝に相違があることがわかった。

南伝も北伝も阿僧祇劫を知っている。それを三とする（北伝）か、四とする（南伝）かに相違がある。その上、北伝は百劫、南伝は十万劫を加える。後者は百劫を十万に増した（千を掛けた）ように見える。南伝は釈尊の九劫超越の物語を知らないか、あるいはそれを採用しない。南伝では仏の願の期間が、声聞や辟支仏のそれよりも長いことを強調している。[3] これは九劫超越とはあいいれない考えかもしれない。

北伝は最初の仏を釈尊と全く同名の釈迦牟尼仏とする。しかもこの仏はその父母、両大弟子（舎利弗、目連）、侍者（阿難）も、全く釈尊のそれに等しい。その仏に逢った広熾陶師はその仏に供養して、その仏と全く同じようになるようにという誓願を発したという。これは、恐らくは現在の仏、釈尊を過去に投影したものと考えられる。『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻十二には、一貧女が燈明を釈尊に供養して、釈迦仏と同じようになろうと、誓願を発して、世尊によって成仏の受記を蒙る。その授記の内容を見ると、全く同じ釈尊が未来にも出世することを予言するものである。釈尊を未来にも投影したのである。釈尊をとりわけ重視したのであろう。

南伝も釈尊を重視し偉大な存在と見ることは同じである。しかし、北伝は南伝に比して仏名を多く考え、仏の数をも増し、釈尊前生における誓願の物語を多く伝え、それらを三阿僧祇劫と九十一劫に配している。[4] 南伝は劫の数を多くしたが、北伝に比して、構想力、想像力に乏しいことが、釈尊の前生に関する物語についても、うかがわれると思われる。

**註**

（1）これらの偈に示される情景が、西域ベゼクリクの洞窟寺院の壁画に描かれた。これについては『シルク・ロード遺跡の旅――ベゼクリク、敦煌、炳霊寺――』（第三文明社、レグルス文庫、昭和五十七年）、『西域の仏教遺跡――ベゼクリクの誓願画――』（第三文明社、昭和五十八年発行予定）参照。

（2）果（成仏等）を得るまでの期間を幾何とするか、他にも異説がある。『仏本行集経』巻四は然燈仏を百阿僧祇劫の昔とする。また十世紀末――十一世紀前半のラトナーカラシャーンティの『三乗建立』には、

「中観派は広大を欠くから三阿僧祇劫をもって〔仏〕果に入り、瑜伽行者の者も同様である。同様に声聞も独覚も四阿僧祇劫をもって自らの最上の果を受けるが、最上乗（密教）の者たちは、僅かの時をもって無住処涅槃を得る」（『東北目録』No. 3812, fol. 102 $a^{2-3}$,『影印北京版西蔵大蔵経』vol. 81, No. 4535 p. 153 $c^{2-3}$）

とあり、仏より声聞、独覚が得果のために多くの期間を必要とすること、密教は速かに成仏を得ることを述べている。磯田熙文『「Muktāvali」について』（『印度学仏教学研究』第二三巻第一号、昭和四十九年十二月、六七ページ）参照。これについては小林守君の教示をえた。

（3）尤も『倶舎論』巻十二には、独覚（＝辟支仏）を部行と麟角喩とに分け、『麟角喩の者は要らず百大劫に菩提の資糧を修して、然る後まさに麟角喩独覚と成る』といっている。仏の三祇百劫に比して、独覚の修行の期間を短く見ていることになる。

（4）さきに触れた王統史と諸仏の系列とは全く関連がない。しかし先の王統史は世界の発生から説きおこしており、この賢劫の初めからの出来事である。賢劫には迦留村陀（拘婁孫駄）、迦耶迦牟尼（拘那含）、迦葉および釈尊の四仏が出世されたという。



# 寶唱の『衆經目錄』について

藤井照之

梁代に作られた寶唱（生没年不詳）の『衆經目錄』四巻（以下『寶唱錄』）は隋代までは伝わっていたようであるが、其の後失われて現存していない。[1] しかし、其の概要については『寶唱錄』以後に作られた『歴代三寶紀』（『長房錄』[2]）・『大唐内典錄』（『内典錄』[3]）・『開元釋教錄』[4]・『貞元新定釋教目錄』[5]の中に見ることができ、また、「見二寶唱錄一」或は「寶唱錄云」といった形で頻繁に引用されている。[6] 此の『寶唱錄』については、これまで目録そのものとしては信憑性に乏しく資料的価値が低いという理由で殆ど顧みられることが無かった。しかし、目録としての評価は別として、其の成立と背景を探ることで、梁代仏教の一面を明らかにすることができると思われる。そこで本稿では、『寶唱錄』が梁代仏教（特に武帝を中心とする知識人の仏教）と如何なる関りをもって成立したのか、また、寶唱の撰述全体の中でどのような位置を占め

# 佛教論叢

第26号

昭和57年9月

浄土宗教学院